

本サービスにおける著作権および一切の権利はアイティメディア株式会社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスの出力結果を無断で複写・複製・転載・転用・頒布等を行うことは、法律で認められた場合を除き禁じます。

「英語に愛されないエンジニア」のための新行動論 一番外編一：

## “Japanese English”という発想(前編)

<http://eetimes.jp/ee/articles/1311/26/news011.html>

「自分は英語が話せない」――。皆さんがそう思うときは、多かれ少なかれ米国英語/英国英語を思い浮かべているはずですが、「英語」とは米国英語/英国英語だけではありません。英語は、世界中の国の数だけあるのです。もちろん日本にもあって、それは“Japanese English (日本英語)”に他なりません。そして、このJapanese Englishは、英米の2カ国を除けば概ね通じるものなのです。

2013年11月26日 11時00分 更新

[江端智一, EE Times Japan]

われわれエンジニアは、エンジニアである以上、どのような形であれ、いずれ国外に追い出される……。いかに立ち向かうか?→「[『英語に愛されないエンジニア』のための新行動論](#)」連載一覧

この連載では毎回、私の過去のエピソードなどから始めています。本日は2つご紹介させて頂きたいと思います。

### (その1) 典型的な“ダメ回答”

米国赴任中の、独立記念日のお祭りの日だったと思います。

家族で大きな公園の打ち上げ花火を見にやってきて、屋台の兄ちゃんに注文をしました。

“コーク、プリーズ”

コカコーラでもペプシコーラでもなく、“コーク”です。

「おっと、まいったな。私もすっかり、アメリカナイズされちゃったぜ」と、ちょっと悦に入っていたところ、その兄ちゃんが逆に尋ねてきました。

“One?” (1つか?)

「え?何ですと?」と日本語で答えてしまった後、(しまった)と思いながら“Sure. One please”と言って、1本のコーラ瓶を受け取りました。

私のちょっと得意な気持ちは、たちまち台無しになってしまいました。そして、「(コーラ)と言えば、そんなもん、一本に決まっとるだろうが」と、その兄ちゃんに心の中で変な八つ当たりをしていました。

米国赴任中、こういう場面には、ちょくちょく出会いました。

前回お話した、“Yes, I don't.”に始まり、スーパーマーケットでは、レジが終わった後に言われる“Anything else?(他に何か御用は?)”に対して、「大丈夫だ」という意味で“Yes, thank you”と答え、レジのお姉さんを凍りつかせてしまったこともあります。(正解は“it's O.K.”とか“No. Thanks”)

Do you mind if I open the window? (窓を開けてもいいですか)に対して、「ええ、構いませんよ」のつもりで“Yes, please”と答える(正解は“No, not at all”)などは、中学、高等義務教育過程では必ず出てくる、日本人の典型的な失敗例です。

つまり私は、学校で教えてもらった「このように答えてはダメ」の地雷を、米国赴任中に全部踏んできたのです。

(その2)ESLにて

私は、赴任先であるコロラド州の大学で、英語コースの入学試験を受けた際、『あなたは何年間、英語を勉強してきましたか』と言う質問に対して、

20年以上

とは、書くことができませんでした。

恥ずかしかつたからではありません。用意されていた回答の最高年数が『5年以上』だったからです。つまり、5年以上も英語を勉強している者は、100年間勉強しているものと同様であるという、暗黙の了解があったわけです。

しかし、高校卒業が大多数を占める昨今、『英語教育6年以下』の戦後生まれの日本人を見つけたのは、かなり難しいのではないかと思います。

□

こんにちは。江端智一です。

本日は、EE Times Japan編集部のご許諾を頂き、私の昔のコラムに大幅な加筆をして、前後半の2回に分けて再掲することになりました。

今回は、前回の予告通り、『英語』という名称の言語は、もはや存在しない』というお話をさせて頂こうと思います。前編では、『米国/英国英語』は捨ててしまおう』がテーマです。

英語が「通じる」「通じない」のボーダーラインはどこ？

---

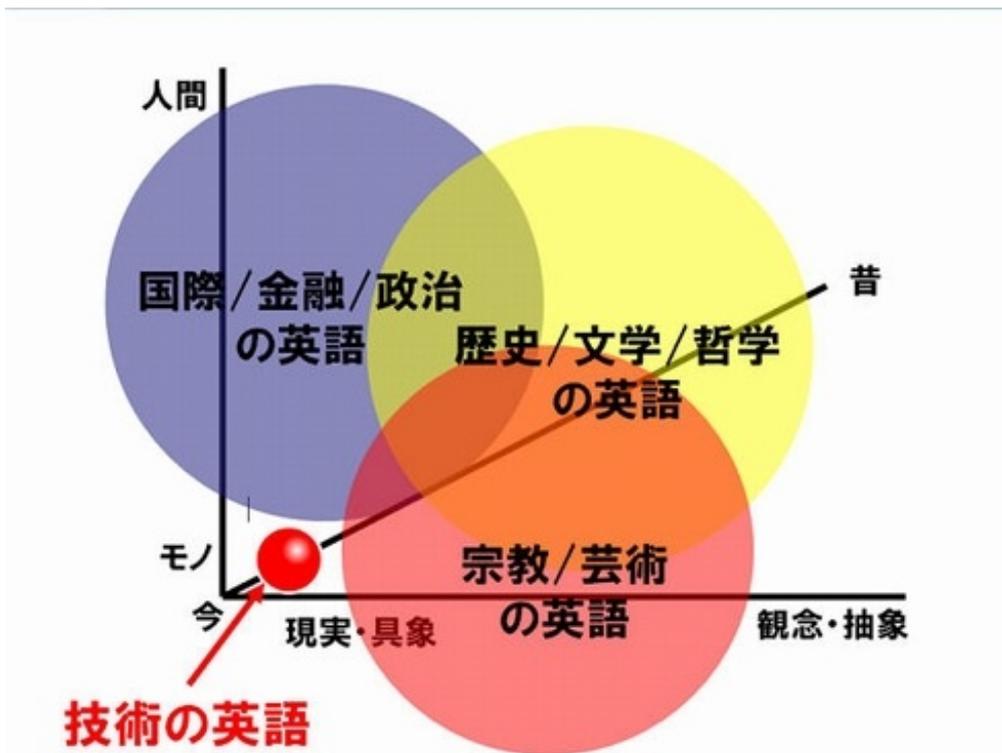
では最初に、「コミュニケーションとは何か」ということを再考してみたいと思います。

以前から何度も使っている事例ですが、海外の人が、「ワタシ / シンジュク / イク / キップ」の4つの単語を並べれば、「ああ、この人は新宿行きの切符を買いたいのだな」と理解できます。私自身、この方法(単語のみの羅列)で、世界中の英語の通じないエリアを、一人で歩いてきま

した。

しかし、『そのやり方では、ビジネスとしては使いものにならないのじゃないか?』——と、考えられるかもしれません。

私は現在、日本でも有数の、大量のエンジニアを雇用する会社に勤務しており、そこで本当にさまざまなエンジニアの方とお話をさせて頂く機会を得ました。その話をまとめて、導いた結論が、[第6回](#)でご説明した「技術英語」という概念です。



「技術英語」が対象としている範囲は、非常に狭い

さらに、この「技術英語」の考え方すらも必要ない究極のコミュニケーション「ジェスチャー」のお話をしてもらったこともあります。その方は「指差し」と「両腕で○と×を示すジェスチャー」だけで、製造現場の製品不良を検出する仕事をされていたそうです。

皆さんが使用されている、パソコンや家電製品、そして、生活インフラに至るまで、このレベルのコミュニケーションをベースに製作されている(場合もある)という事実を、まずは覚えておいて下さい。

第二に、私たちの英語のレベルを検証します。

この記事を読まれている、エンジニアの皆さんの英語は「通じます」。

まず日本国内の日本人同士であれば、間違いなく通じるはずですが(ふざけているわけではありません)。なぜなら、我が国の国民の教育は、国家の方針に従って、共通化されたプラットフォームの上で行われているからです。まったく同じ教育カリキュラムを受けている以上、私たちの英語は、良くも悪くも画一化されているのです。

そして、私たちのこの英語は、特定の2カ国を除き、全世界で「通じます」。

お隣の韓国、中国共に、ヒアリング、スピーキングともに大丈夫です。25年前の学生時代の私でも保証できます。東南アジアは、概ね全域O.K.。インド、スリランカ、中東の方の英語にはクセがありますが、そのうち慣れます(ヨーロッパでの英語は、ちょっと断言できないです)。

そして、私たちの英語で、太刀打ちできない国が、米国と英国の2カ国です。

では、私たちの英語が「通じる」「通じない」のボーダーはどこにあるのか？

それは、英語を第二外国語として後発的に教育された国であるか、母国語として使用している国か、の違いにあります。

[前回の連載](#)でお話した通り、英語を母国語としている米国人の多くが、世界中の人間が「英語を使えない」ことを理解できません。彼らは「世界共通言語=母国語」という勘違いをしているからです。しかし、「英語」は世界共通言語ですが、「米国英語」や「英国英語」が、世界共通言語というわけではないのです(後半でお話します)。

## 非ネイティブ同士の会話は盛り上がる

---

ジェスチャー(と執念と熱意)だけで、工業製品のクオリティコントロールを実現できるエンジニア達に、いわゆるTOEICのような英語は必要ありません。そんなものは、なくてもよいのです。というか、ない方がよいのです。

また、以前お話ししましたが、英語を母国語とする人口は世界の5%にすぎません([TOEICを斬る\(後編\) ~“TOPIC”のススメ~](#))。非英語圏は世界の95%で、このコラムの主な読者の皆さんの主戦場は、(原則)非英語圏である人口45億人を擁するアジア圏であると思われます。

アジアであれば、世界最大の人口を有する国の言語、中国語の履修が最もメリットがありそうに思えるのですが、母国語を共通言語とされてしまうと、前述した米国・英国と同じ話になってしまいますので、ここは英語を世界共通言語のままにしておく方が、我が国には有益でしょう。

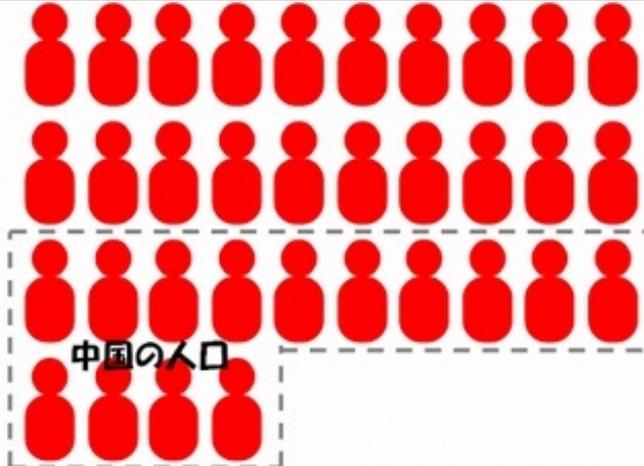
日本の人口  
約1億人強(約1%)



米国・英国の人口  
4億人弱(約5%)



日本を除く  
アジアの人口  
34億人強(約50%)



英語を母国語とする人口は、世界人口の5%にすぎない

では、米国と英国で通じない英語をどうするか。

この2カ国の方との会話によるコミュニケーションは諦めてしまえばよいのです。

この国の言語の会話に合わせようとするから、「会話」を目的とした日本の英語教育はことごとく失敗するのです。

私はいまだに、“R”と“L”の発音の違いを、病的に気にする人(英語教師に多い)の気持ちが分かりません。その単語が通じなかったら、別の単語で言い直せば済むだけのことで、ホワイトボードにその単語の綴りを書く、または、簡単な線画を描けば、それで事足ります。

そもそも、第二外国語圏内では、単語の発音というものの自体が、もうデタラメでメチャクチャのカオスです——しかし、それでも通じるのです。

英語を母国語としない者(いわゆる、非ネイティブ)同士の英語による会話というのは、それはもう、ビックリするくらい弾みますし、盛り上がりませ(お酒が入ると、さらにヒートアップします)。なぜなら、非ネイティブ同士は、文法も時制も踏みこじって、英単語というパーツを羅列するだけでコミュニケーションを図れるからです。

私的な意見ですが、そこには「英語教育」に対する、怨念の共同体意識があるのではないかと考えています。



画像はイメージです

## ESLの仲間たちの英語は“ムチャクチャ”だった

---

さて、米国赴任中の話に戻します。

嫁さんと私が、あのフォートコリンズという小さな街で、わずか2年間のESL(English Second Language school[英会話教室])で出会った仲間の出身国は、実に20カ国にも上ります。

メキシコ人、スペイン人、韓国人、ブラジル人、インドネシア人、ヨルダン人、インド人、マレーシア人、ベトナム人、ポーランド人、サウジアラビア人、チュニジア人、ロシア人、フィリピン人、ペルー人、コスタリカ人、ポーランド人、カナダ人、そして日本人。さらに、その中には、亡命予定の中国人などの、特殊な事情を持った人々も含まれていました。

ESLで驚かされることは、多くの外国の学生たちが威風堂々と英語をしゃべることです。

その内容は時として、拙く、思慮の足りない、青くさい理想論であったりもしますが、彼らの多くは、与えられた時間の限りを尽くして自分の主張を英語で述べます。

日本人である私は、必ずしも自己主張そのものが、正しい振る舞いであるとは思いませんが(実際、アホな主張には腹が立つ)、その姿勢に圧倒され、感動しました。

そして、私が本当に感動したのは、彼らのしゃべる英語が、それはもう見事なくらい、

デタラメな文法、メチャクチャな発音

から構成されていたことにあります。

彼らは、時として英語そのものを習得することよりも、自分の考えを他人に理解させようとするにおいて、情熱的であり、狂気といえるようなすさまじさを発揮することもありました。

### “ドメスティックイングリッシュ”

---

ここで考えてみたいと思います。

「デタラメな文法」「メチャクチャな発音」と言うのは、そこに「正しい文法」「正しい発音」という基準があるからです。では一体、何を基準としているのでしょうか。

現在、日本国が考えている英語の基準は、米国英語と英国英語です。私たちは、この2つの国の言語形態に合わせるべく教育を施され——繰り返しますが——、少なくとも「会話」に関しては、間違いなく、ことごとく失敗に終わっています。

少し視点を変えて考察してみましょう。



日本には、さまざまな方言があります。その数については、5とも18とも、または数百あるとも言われていますが、これを定義し、数を確定することは、無理であり無意味でしょう。

しかし、それらの方言は各地域において独自の言語体系として成り立ち、その地域の文化を未来に運ぶ手段であるばかりでなく、「文化そのもの」であるといっても過言ではありません。

仮に、方言の使用を禁止し、標準語なるものに制定しようとする力(法律とか制度とか、ファシズムとかで)を発動したとすれば、それは文化の多様性を否定し、世界を魅力のないものとするでしょう。

私たち日本人は、勘違いしているのです。

“世の中には「唯一無二の英語」がある”と。

私の嫁さんは、先程述べた20カ国に上る出身地のESLの生徒たちと、ほぼ完璧に近いレベルで、日常生活上での意志疎通に成功していました。信じられないかもしれませんが、彼らは、彼ら独自の言葉を用いて、インターナショナルなコミュニケーションに成功しているのです。

この共通の言語とは、「英語」ではありません。

私は、これらの言語を、ドメスティックイングリッシュ(国産英語)、あるいはローカルイングリッシュ(地域英語)と呼んで、現在に至っております。

日本における、このドメスティックイングリッシュとは、まさしく、

日本英語

Japanese English

に、他なりません。

英語は、もはや英国や米国の言語という意味で使用する必要はありません。

英語とは、世界中の国の数だけあるのです。ある言語がある土地に定着して、変化せず何百年も存続することはあり得ません。そんな言語、はっきり言って気持ち悪いです。

我が国における英語教育は、文部科学省の指導下にあります。それはそれでよいのです。文部科学省は、英国・米国英語ではなく、「日本英語」を教える指導に転換すれば、それで十分なのです。



画像はイメージです

□

では、次回の[後編](#)では、この「日本語」とは何かについて、詳細に説明したいと思います。

本連載は、毎月1回公開予定です。[アイティメディアID](#)の登録会員の皆さまは、下記のリンクから、公開時にメールでお知らせする「連載アラート」に登録できます。



## Profile

江端智一(えばたともち) [@Tomoichi\\_Ebata](#)

日本の大手総合電機メーカーの主任研究員。1991年に入社。「サンマとサバ」を2種類のセンサーだけで判別するという電子レンジの食品自動判別アルゴリズムの発明を皮切りに、エンジン制御からネットワーク監視、無線ネットワーク、屋内GPS、鉄道システムまで幅広い分野の研究開発に携わる。

意外な視点から繰り出される特許発明には定評が高く、特許権に関して強いこだわりを持つ。特に熾烈(しれつ)を極めた海外特許庁との戦いにおいて、審査官を交代させるまで戦い抜いて特許査定を奪取した話は、今なお伝説として「本人」が語り継いでいる。共同研究のために赴任した米国での2年間の生活では、会話の1割の単語だけを拾って残りの9割を推測し、相手の言っている内容を理解しないで会話を強行するという希少な能力を獲得し、凱旋帰国。

私生活においては、辛辣(しんらつ)な切り口で語られるエッセイをWebサイト「[江端さんのホームページ](#)」で発表し続け、カルト的なファンから圧倒的な支持を得ている。また週末には、LANを敷設するために自宅の庭に穴を掘り、侵入検知センサーを設置し、24時間体制のホームセキュリティシステムを構築することを趣味としている。このシステムは現在も拡張を続けており、その完成形態は「本人」も知らない。

本連載の内容は、個人の意見および見解であり、所属する組織を代表したものではありません。

## 関連リンク

[筆者の個人Webサイト「江端さんのホームページ」](#)

Copyright © 2016 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

